

# 平成21年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ フカヤ テルヒコ  
氏名 深谷 輝彦

研究期間 平成21年度

研究課題名 英語コーパスにみる評価表現の体系：話し言葉と書き言葉の比較

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	深谷輝彦	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

本研究の目的は、英語の評価表現を話し言葉コーパスと書き言葉コーパスで比較することである。これを100万語のイギリス英語コーパスを用いて体系的に調査する。そしてすでに選択体系機能文法で提案されている評価表現体系の中に、頻度情報を追加し、また話し言葉と書き言葉の体系的違いを明示することが、本研究の目的である。

コーパスに基づく英語研究については、かねてより量的研究ばかりで、質的貢献が薄いという批評が寄せられている。そこで、選択体系言語学の体系及び談話分析との提携をはかることで、質的研究の基盤をぜひ作りたいという研究方針が背後にあって、今回の英語評価体系調査を発想している。

## 2. 研究方法等 (300字以内で記述)

1. Hunston & Thompson (2000) *Evaluation in Text* や Martin (2005) *The Language of Evaluation* に代表される評価表現研究を評価し、調査項目を決定する。
2. ICE コーパス英国英語版(100万語)で綿密な頻度及び文脈調査を行う。
3. Martin が提案する英語評価体系に基づき、話し言葉と書き言葉の下位体系を作成する。
4. 3に頻度情報、文脈情報を付加し、話し言葉・書き言葉評価体系の比較を行う。

### 3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

本研究の結論は、話し言葉では評価形容詞が人間中心の評価を、他方、書き言葉では同形容詞が状況中心の評価をしているという点である。

#### (1) 構文的考察

it is に続く評価形容詞文(e.g. “It is important to explore yourself.”)を ICE-GB コーパスから収集すると、話し言葉では 70 例、書き言葉では 186 例という頻度が得られる。つまり主語に人間が表れず、仮主語+評価形容詞+(不)定節という状況の評価する文は書き言葉が得意としていることが分かる。さらに、話し言葉では it is nice/ lovely/ unfair のように、(不)定節を欠いている評価文が観察できる。つまり話し手・聞き手は話し言葉の豊かな文脈に依存し、評価対象を明示していない。書き言葉に目を転じると、It is important to note here that ..., It is temping to say that ... のような発話動詞の to 不定詞節が形容詞に後続している文が特徴的である。談話の流れに対する書き手の下す評価を表現している。

#### (2) 語彙的考察

right という評価形容詞が、例えば I/ you という人間を主語にとると、その実例はすべて話し言葉に実現する。ところが、it is right that ... という状況構文になると、話し言葉と書き言葉の両方に分布する。right の反対語 wrong が it is wrong to の構文に生起すると、書き言葉からの実例が大半である。人+BE+ wrong+ in+~ing となると人間評価が打ち出され、話し言葉が中心となる。また something/anything/nothing wrong と連鎖は、話し言葉に集中している。

本研究により、評価形容詞の意味体系では人間評価と状況評価の区別が話し言葉と書き言葉での具現頻度にリンクしていることが明らかになった。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを 1 以上 8 以内で記載)

①評価形容詞	②話し言葉	③書き言葉	④体系
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

●この研究は、以下のシンポジウム発表の一部をなしている。

深谷輝彦

「コンコードダンス・ラインが語ること、語らないこと：英語評価表現の場合」

英語語法文法学会第 17 回大会

2009 年 10 月 24 日

●上記発表をもとに修正発展させた論文を執筆し、『英語語法文法研究』第 17 号に投稿予定である。